新今昔物語

第56話

古堤街道を往く⑲

「残念石と小豆洗いの話 ～御供田地区にまつわる伝承～」

御供田公園の北側に高さ約1.3メートルの大きな自然石があります。伝承によると、今から400年ほど前、当地付近で大坂城の再築工事に用いる石を積んだ舟が沈む事故がありました。その後、深野池の開発により田畑となった当地では、村人たちがたびたび病気にかかるという奇妙な現象が起こり、村人は事故で命を落とした人の霊の仕業と考え、土盛りをして供養を執り行うようになったそうです。

現在残る自然石は、公園が作られる際に土盛りが削られてしまうため、昭和47年（1972）に地元の有志によって新たに設置されたものです。地元では、運搬途中に落ちた石は縁起が悪いとされ石垣に用いられることはなく、「残念石」と言われました。市内にはこのような残念石にまつわる伝承が各地に伝わっています。

御供田公園の「残念石」

御供田公園を後にし、恩智川に沿って北側に歩いて行くと、正面に御供田新橋が見えてきます。以前も紹介したように、かつて恩智川はこの橋の辺りで西向きに流路を変え、現在雨水貯留施設となっている場所を流れていました。川の南岸を古堤街道が通り、御供田新橋の辺りには「久太の橋」が架かっていたそうです。村人は川岸をヒナラ（洗い場）として利用していましたが、氏神の八幡神社裏手のヒナラに行くと、小豆を洗うような不思議な音がどこからともなく聞こえたことから、小豆洗いの妖怪が出るという言い伝えが広まったそうです。

昭和40年代に恩智川の流路が付け替えられ、まちの風景が変化するとともに、残念石や小豆洗いの伝承を知る人も次第に少なくなりましたが、いずれも大東市を代表する民話として語り継ぎたいものです。

次回は御供田新橋を渡り、平野屋方面へ向かいます。

（生涯学習課）

北西方向から見た御供田新橋